

# 短期大学における被服構成および 実習に関する研究(第5報)

洋裁教育およびブラウスに関する実態調査

荻野千鶴子・古川智恵子  
加藤恵子・皆川琴江

**Studies on the Lesson and Practice of Dress  
Composition in Junior College (Part 5)**

Investigation on the Real States of  
Dressmaking Education and Blouse

by

C. OGINO, C. FURUKAWA  
K. KATŌ and K. MINAGAWA

## 緒 言

短期大学における被服構成および実習に関する研究を重ねてきたが、前第4報において全国短大の洋裁教材として最も多く履習されているブラウスの縫製時間について、本学学生を対象に実験を試みた結果、高校の出身課程による差が相当みられた。短大の被服構成および実習の成果については、入学前の既習学力の差などの影響による本人の能力が問題になってくる。これをどう処理したらよいかといろいろ研究をすすめているが、今回は全国の短大において、どのように指導されているか、ブラウスにしぼってその現状を調査し、また本学の実態もあわせて調査を行なったので報告する。

## 調 査 方 法

I 本学短期大学家政科の被服を主とする学生を対象にアンケートによる意識調査を行なった。内容は表1のようである。回収率は98.7%であった。

表1 本学調査

年 月 日	昭 和 4 6 年 4 月 中 旬		
学 年	1 年	2 年	計
学 生 数	137	147	284

II 全国家政系の短大に設問項目によるアンケート用紙を配布し、これを回収した。表2のように有効回答数は85校42.7%であった。

表2 全国調査(昭和46年10月中旬) (単位:校)

地区	項目	発送数	有効 回答数	回答数の内訳				
				家政科			被服科	その他
				家政	被服	その他		
北海道		8	2	2				
東北		18	7	4		2	1	
関東		42	17	9		4	2	
中部		22	17	5	8	1	2	
関西		51	19	10	5	2	1	
中国		31	13	8	2		1	
九州		27	10	4	3	1	2	
計		199	85/42.7%	42	18	10	9	

結果および考察

I 本学学生の実態調査

1) 短大入学の動機および目的

本学被服を主とする学生を対象に調査した結果、図1のように、短大入学の動機については、「両親や先生のすすめ」によってというのが47.6%、自主的に「被服への関心」をもってが32.4%、「短大への魅力」が12.4%であった。「両親や先生のすすめ」のうち本人は他学科を希望していたが家族等のすすめに従ったという学生が多くみられる。

また短期大学入学の目的については、「人格教養を高める」が59.5%で最も高く、「専門の技術を修得のため」が19.6%、「専門の知識」を得るためが16.1%などで約半数は人格教養を高め、よりよい生活を目的としていた。

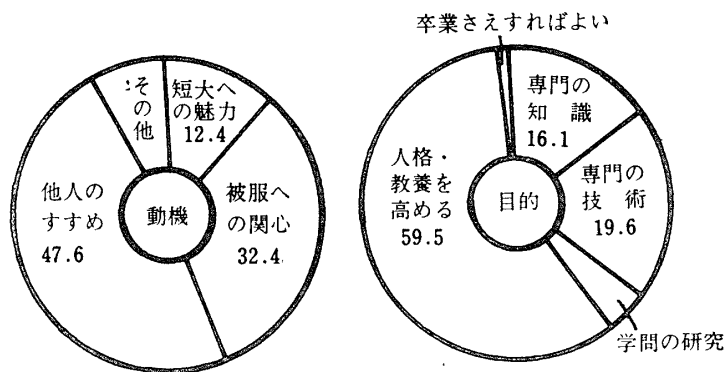


図1 短大入学の動機・目的

2) 洋裁教育への期待度

短期大学の洋裁教育については、図2のように1, 2年とも、「自分の服と子供の服」ができるようになりたいというのが最も多く約半数を占めており、つぎに、「自分自身」のものができるようになりたい学生が1年で19.2%、2年で18.0%とほぼ同率であった。また、「職能人」をめざしているものは1年では18.6%、2年では7.9%であって1年次の約1/2に2年の学生は

減少していた。しかし卒業後さらに洋裁学校に行き技能を伸ばしたい学生は1年で8.4%，2年は20.2%であり，2年生は1年生の2倍半であった。これは1年は被服構成の授業の成果に期待をもち，卒業後は職能人になることを望んでいる学生が多いのに比べ，2年次になるとこの希望が減少するのは，被服構成のむずかしさを知り，さらにより深い習熟を希望する者が増加したものと考えられる。

### 3) 既製服の利用度

つぎに既製服の利用度については，図3のようである。家庭における学生と母親の衣生活の現状を普段着・外出着・小物に分けた。普段着についてみると，学生は既製服が57.5%，家庭製作が41.7%であってこの製作者は，「本人」が最も多くついで「母」「姉」の順であった。また「注文服」はわずかにみられただけである。母親では「既製服」は51.5%，家庭製作は47.9%であり，この製作者は「本人」「姉」「学生」の順であった。そして「注文服」はわずか9%であった。つぎに外出着についてみると，学生は「既製服」は56.8%，「注文服」は21.5%であり，家庭製作は21.8%であり，製作者は「母」「姉」「本人」の順であった。学生の外出着は普段着に比べ「注文服」が多く家庭製作が減少していた。母親では「既製服」は39.4%，「注文服」は37.2%とほぼ同率を示し，家庭製作は23.4%であり，製作者は「本人」「姉」「学生」の順であった。つぎに小物類としてはエプロンや袋物などをとりあげたが，これは既製品と家庭製作でほとんどを占めているが，学生のみならずかであるが「注文」がみられた。

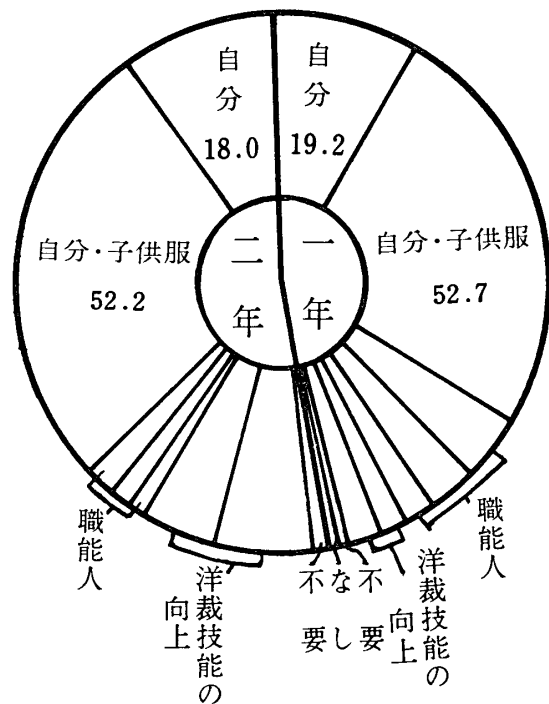


図2 洋裁教育への期待度

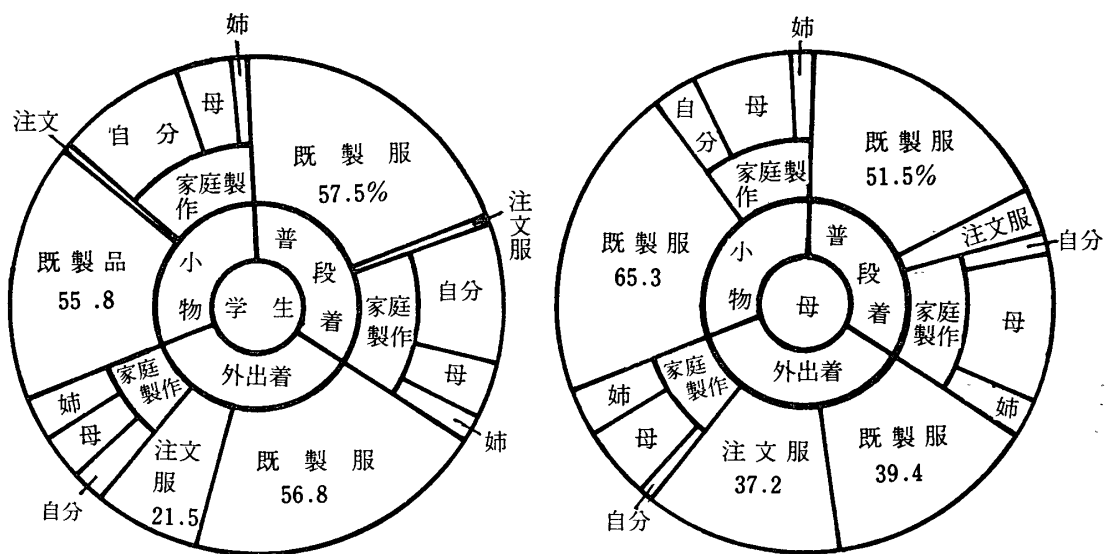


図3 既製服の利用度

以上のように既制服の利用度は、普段着、小物類において学生・母親ともに50%以上であり、外出着では学生のみ半数以上の利用がみられた。

## Ⅱ 全国短大の洋裁教育について

### 1) 高校出身課程別およびこれに対する配慮

短期大学における学生の高校出身課程別の割合は、表3のように、全員が普通課程出身者である短大は21.2%であり、家政課程出身者を含む短大は64.7%であった。その中で家政課程出身者の占める率の最も多いのは11~20%で、この学校が17.7%であった。ついで1~5%の学校が15.2%、6~10%の学校が10%を占めていた。以上のように約半数の短大は家政課程出身者と普通課程出身者を含んでいた。このような学生が入学した短期大学において、能力差のひずみを少しでも緩和するように洋裁の授業において、どのような配慮がなされているかを調べた結果は、表4のようである。「配慮していない」が14.2%、「配慮している」が48.3%であり、配慮されている点としては、細目上においては「デザイン、材質などをかえさせる」が21.2%、「細目点数を増やす」は7.1%、指導法においては「個人またはグループで指導」したり「助手を増す」などするが11.7%、冬期、夏期などの「休暇に課外指導する」が7.1%であった。

表3 高校出身課程別数（家政課程出身者の割合）

（単位：%）

		0	1~5	6~10	11~20	21~30	31~40	41~50	51~85	無記入
家 政	1年	20.00	11.76	8.24	10.59	4.71	5.88	1.18	7.06	8.24
	2年	18.82	14.12	7.06	12.94	2.35	7.06	3.53	3.53	10.59
被 服	1年	1.18	1.18	2.35	2.35			2.35		1.18
	2年	1.18	1.18	1.18	2.35	1.18	1.18		1.18	1.18
そ の 他	1年	1.18	2.35		3.53				1.18	3.53
	2年			1.18	3.53				1.18	3.53
計	1年	22.35	15.29	10.59	16.47	4.71	5.88	3.53	8.24	12.94
	2年	20.00	15.29	9.41	18.82	3.53	8.24	3.53	5.88	15.30
総 計		21.18	15.29	10.00	17.65	4.12	7.06	3.53	7.06	14.11

表4 高校出身課程への配慮

（単位：%）

方法		北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州	計
なし（基礎から）		1.2	2.4		2.4	3.5	3.5	1.2	14.2
講義細目変更		1.2							1.2
指導法	個人又はグループ（助手・副手を増す）				1.2	3.5	4.7	2.4	11.7
	休暇の課外			5.9			1.2		7.1
細目	デザイン材質をかえる		2.4	3.5	4.7	2.4	4.7	3.5	21.2
	点数増加			2.4	1.2	1.2	1.2	1.2	7.1
無 解 答			3.5	8.2	10.6	11.7		3.5	37.5

また無解答が37.5%みられるが表3のように、普通課程出身者のみの学校ではこのような配慮は必要がないので、このように最も高い率が出たものと思われる。

## 2) 洋裁方式およびテキスト

つぎに洋裁方式については、表5のようである。「大学独自」が37.6%を占め、ドレメ式、文化式、伊東式が55.2%であり、中でも多いのが文化式の24.7%、ついでドレメ式の17.6%であった。つぎにこれを地区別にみると、関西地区では、各式いろいろみられるが、中でも多いのが伊東式でこれを採用している短大が5校あった。中部地区においては、大学独自と文化式が多くみられ、地区により方式にややかたよりがみられた。

表5 洋 裁 方 式 (単位：校)

方式	地区	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州	計	%
大学独自			4	9	6	3	9	1	32	37.6
ドレメ式		1	3	1	3	4		3	15	17.6
文化式		1		3	7	3	3	4	21	24.7
伊東式						5		1	6	7.0
田中式					1	1			2	2.4
二式併用				1		1	1		3	3.5
その他				3		1			4	4.8
規定せず								1	1	1.2
無記入						1			1	1.2

つぎに採用しているテキストについて図4で見ると、文化系、ドレメ系がそれぞれ23.9%を占め、ついで「大学独自」のものが20.0%であった。また特定のテキストを用いないでプリント等ですすめている学校も多少みられた。

## 3) 履習内容

つぎに細目としてどのようなものを履習しているか、またこれを1年次と2年次に分けると

図5のようになる。スカートは1年次で96%とほとんど全部履習し、ワンピースでは56%と約1/2が1年次で作り、この2点は全調査校が製作していた。またブラウスは1年で80%、2年で10%とほとんど1年次での履習に見られるが、ワンピース、コートのような高度の技術を要するものは、2年で実習しているところが大半であった。

一昨年の調査では、ブラウスを製作する短大が100%以上を占めていたが、今回では細目に加えていない短大が12.9%あった。これらの短大では既製ブラウスの選び方、購入方法等の消費者教育に重点をおいた講義や、夏用の簡単なワンピースを製作しており、現代の社会的背景や学生気質を考慮した新しい試みが、細目設定の上に見られた。被服での一貫教育の上からも、中学・高校ですでにブラウスを履習しており、また家政課程では、ブラウス早縫の検定もしているため、短大の洋裁教育ではむしろワンピースに重点を置いた方が学生にとってもより

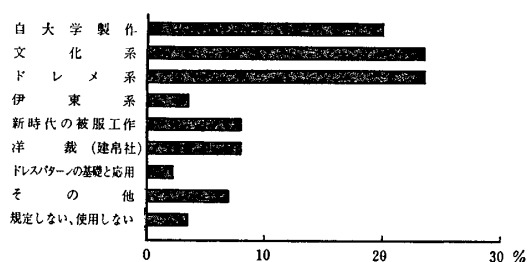


図4 使用テキスト

有意義である。また、これは被服構成学上からみて、ブラウスとスカートがウエストで接ぎ合わされたものが、ワンピースであり、スカートとワンピースは100%履習しているという調査結果と考え合わせて、ブラウスの製作技術は、このワンピースの分野において要素を把握させているものと推察される。

### Ⅲ ブラウス製作について

#### 1) デザインの選び方

つぎにブラウスのデザインの選び方については、図6のようである。これによると、教師が先ず参考スタイルとして選ぶ場合が最も多く44.6%、次に服飾雑誌その他から「好きなデザインを選ぶ」が24.3%、好きなデザインブックから自由に選んだり、「自分の創作」でデザインするのが第3位で21.6%、全く自己の創作によるものは2.7%と極く低率を示している。また教師がデザインを選ぶ場合の参考スタイルの点数は、3点が最も高く33.3%で、ついで4点15.2%、5点12%となっている。つぎにデザイン選択の基準についてみると、「布づかい」が最も多く27.5%、次に「流行をとり入れたもの」および「基本型にポイントをおいたもの」が21.6%、「シルエットを主体にしたもの」が19.0%とあまり大差がみられないのは、デザイン選択には、これらの項目のいずれにも一応考慮が払われている結果であろうと考えられる。

#### 2) 製作時期および時間

ブラウス製作時期を表6によりみると、1年次で製作する短大が83.5%で、そのうち大半が前期で57.6%、後期22.4%で1年の前後期にわたってするところも、わずか3.5%とみられるが、ブラウス製作をしていないところも12.9%みられた。それらの地区別の内訳は表の通りで

表6 ブラウス製作時期 (単位：%)

時期		地区	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州	計
1年	前期			3.5	15.3	12.9	10.6	9.4	5.9	57.6
	後期		2.4	1.2	1.2	3.5	7.1	3.5	3.5	22.4
	前後期			3.5						3.5
2年	前期				1.2	1.2	1.2			3.6
製作していない					3.5	2.4	3.5	1.2	2.4	12.9

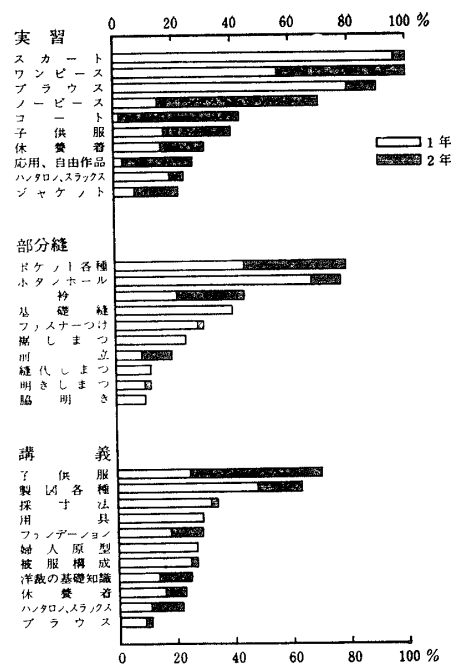


図5 履習内容

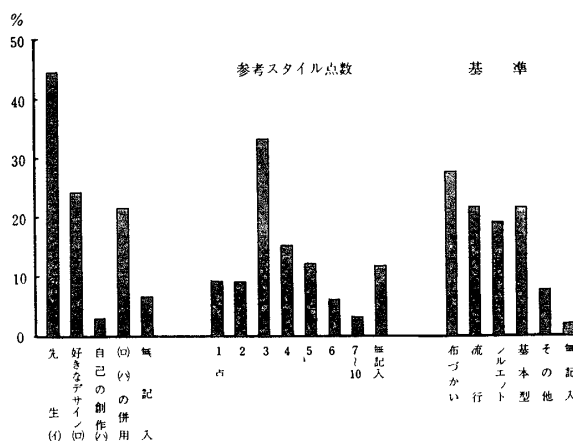


図6 デザインの選び方

ある。

ブラウス製作時間を表7に示す。これによれば最大51時間から最小6時間とその範囲は広く、中でも多いのは16～20時間の20.3%である。このように時間のバラツキが見られるのは、時間の測定方法や、各短大での指導方法にも一因があるため、このような時間差が出たものと考えられる。

表7 所要時間 (単位：%)

時間	地区	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州	計
0～10			1.3	2.7	1.3	1.3	1.3		8.1
11～15				2.7	6.7	2.7	1.3	1.3	14.9
16～20			2.7	1.3	2.7	6.7	2.7	4.1	20.3
21～25			1.3	6.9	4.1		1.3		13.5
26～30		1.3	4.1			2.7	5.4	2.7	16.2
31～35				1.3		2.7			4.0
36～40				1.3	1.3		1.3	2.7	6.7
41～45						2.7			2.7
55							1.3		1.3
無解答		1.3		2.7	4.1	2.7	1.3		12.2

つぎに洋裁授業の学校と家庭の作業配分の調査結果は表8のようである。即ち学校7家庭3の割合が最も多く50.6%，つぎに5：5が25.9%で、家庭作業0というところも3.5%見られた。無記入が10.6%あるのは、正確な配分が把握できていないためであろうか。授業時において一斉指導の場合、個人の理解度や技能に差があるため、クラスの一定水準に追いつけないものは、授業の放課又は家庭での作業が、必然的に行なわれるわけである。それ故に家庭作業は望ましい姿ではないが、実技指導においては、やむを得ないことだろうと考える。

表8 作業の時間配分

学校：家庭	5：5	7：3	3：7	10：0	無記入
%	25.9	50.6	9.4	3.5	10.6

### 3) ブラウス補正について

ブラウス補正に要する時間は表9のように「2～4時間」が最も多く56.8%，ついで「6時間」の12.2%であった。また「0時間」とあるのは1年前期に洋裁指導の基礎として、トワールやシーチングで Foundation pattern を製作し、自己の体型把握を充分に行ない、それを利用してブラウス製作にはいるので、補正の時間は設けていないという説明であった。そして授業中に補正の時間をとらないで、放課後1日10人ぐらいつみするというのが1校あった。補正時間を12時間と多くかけているところでは、1回目は身ごろを重点的にして、2回目は袖つけ直前に袖つけの仮縫をするというように2段階に分けて念入りに補正をしているというものである。

表9 ブラウス補正に要する時間

(単位：校)

時間	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州	計	%
0時間			1	1		1		3	4.1
1時間			2			2		4	5.4
2時間		2	2	6	4	5	2	21	28.4
3時間			1	4	3	1	2	11	14.9
4時間		2	6		1	1		10	13.5
5時間		1			2			3	4.1
6時間	2	1	1	1	3	1		9	12.2
9時間						1	1	2	2.7
12時間			1					1	1.3
放課後 1日10人							1	1	1.3
学生1人 20分		1						1	1.3
学生1人 30分					1		1	2	2.7
無記入				3	2		1	6	8.1

ブラウス補正の指導方法を示したのが表10である。学生が2人以上のグループで補正しあうから教師にみせる方法が最も多く50%，ついで教師の個人指導が43.2%，学生がグループで補正しあうだけというのが6.8%であった。つまり約半数の短大では補正の講義のあと、まず学生同志で補正研究しあい、学生がいかに理解し、表現できるかを実習させ、最終的に教師が観察し、悪い点を指摘して、学生の補正能力を向上させるように向けるのが最も理想的な形と解釈してこのような形で出現したものと考えられる。

表10 ブラウス補正の指導方法

(単位：校)

方法	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州	計	%
学生(教師)		4	7	7	7	7	5	37	50.0
教師(個人)	2	2	6	7	7	5	3	32	43.2
学生(グループ)		1	1	1	2			5	6.8

#### 4) 製作順序

製作順序については図7に示すように、まず「袖作り」では「仮縫補正後、直ちに袖を作り上げる」が36.5%、「つける直前に作る」が21.6%であった。衿は56.7%がつける直前に作っていた。袖や衿のような小物は、学校教育において仕上げに相当期間を要する場合には、保管中余分なしわがつくのでつける直前に作るのが好ましい。ところが1/3以上の短大では初めに袖を作っているが、これは左右の袖を完成して提出させ、採点するためであると考えられる。

また脇縫後に衿つけをするのが54%、脇縫前にするのが16%であった。衿の種類によっては脇縫前の方がつけやすい利点があるが、せっかくそのように指導しても仮縫後、肩・脇の線がそのまま生きる場合は仮縫をほどかないで直ちに本縫に入りたがる学生が多いという短大もあ



だったので、このような結果が出たのではなかろうか。

ボタンつけについては、仕上げの前につけるのが38%、仕上げ後が20%となっているが、本来なら仕上げアイロンを充分にかける意味においては、ボタンなどの付属品をつけるのは仕上げ後が望ましい。

仕上り後、これを着装して反省評価までしているところは15%であった。被服構成ではきれいに仕上げても体型に合わなかったり、その組み合わせにおいても考えさせなければ真の効果は発揮できないと思われる。

各部位の縫代しまつをみると、袖つけは「二度縫後、手でかがる」が61%、玉縁しまつが37%、つぎに衿つけは衿の種類によりしまつの方法は異なるが、バイヤス仕立てが最も多く65.9%であり、脇縫においては「縫代を割って端ミシンをかける」方法が65.9%、ついで袋縫であった。衿つけのしまつでバイヤス仕立てが最も多いのはその利点として、①前身ごろの身返し奥を耳で裁断することができ、見返ししまつより布の用尺が少なくすむこと、②縫製上、肩で接いだりする手間が省けること、③着装上からみて、何度も洗濯した後でも見返ししまつより落ち着きが良いこと、などが考えられる。

袖つけ・脇縫のしまつについて、縫製上早くできるのはピンキングカットやジグザグミシンしまつであるが、まだ今日一般家庭においては、これらに要する機械・器具が高価であるし普及性がないので低率である。脇縫しまつの割り仕立てはどんな材質にも適するため、最も高い率を占めたのであろう。

市販ブラウスの袖つけ・脇縫はほとんどがオーバーロックでしまつされているが、これは今回の調査結果にみられるように学校教育には、まだ応用されていないようである。

今日、縫製技術も社会の進展と共に変わりつつあるので、短大での洋裁教育もこのようなスピーディーさを加味した方向へ向けていく必要があるものと思われる。

#### 5) パターン教育について

作業の能率化が要求されている現在、洋裁教育に Commercial pattern を取り入れている短大は図8に示した通り18校で全体の21%あり、パターンの形態は既製パターンが5.9%、大学独自のものが14.1%であり、既製パターンのほとんどは文化系のものを使用していた。大学独自のパターン使用のところでは市販されているものをそのまま使わせるのではなく、大学が独自に開発したパターンを使い、洋裁教育で得た知識を大いに消化して能率化をはかり、学問研究の場であることを打ち出しているものである。

またパターン使用状況を地域別にみると、「使用している」と答え

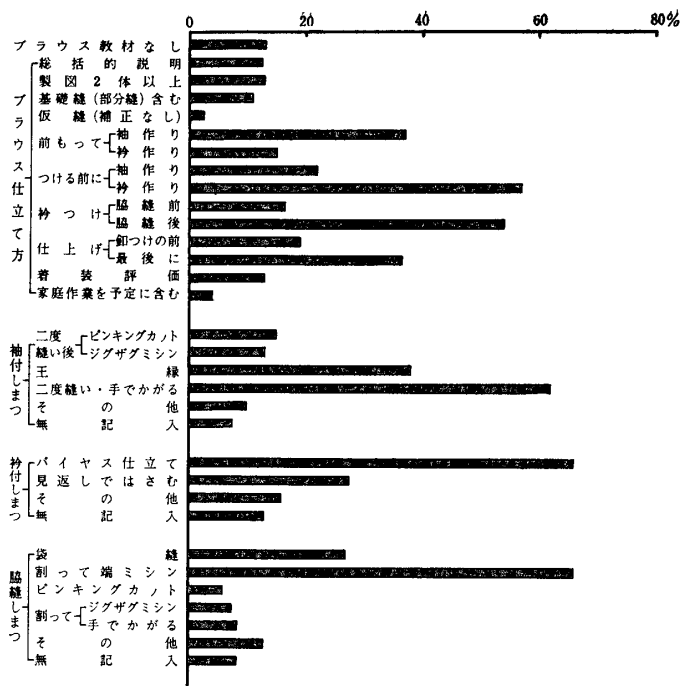


図7 ブラウス製作順序

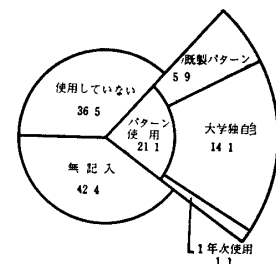


図8 パターン使用状況

たのは中国地方で割合に多く6校あったが、関東・中部では非常に少ない結果であった。

さらにパターンの使用服種についてみると、パジャマが最も多く、ついでスーツ・ワンピースの順でその他は表11の通りである。パジャマが最も多く取り上げられた理由として考えられることは、①休養着であるため基本的なグレーディングをするだけで、特に仮縫補正を必要としないこと、②短大で教員免許状の取得できる中学校の教材に休養着としてパジャマが多く取り入れられていることが挙げられる。

表11 パターン使用服種 (単位:校)

項目	地区								計	%
	北海道	東北	関東	中部	関西	中国	九州			
使用しない	2	3	6	4	10	2	4	31	36.5	
使用している		1	2	2	4	6	3	18	21.1	
無記入		3	9	11	5	5	3	36	42.4	
説明のみ		1						1	4.7	
パジャマ		2	2	1		1		6	28.6	
スーツ					1		2	3	14.3	
ワンピース					1	1		2	9.5	
子供スモック		1						1	4.7	
ジャケット			1					1	4.7	
スカート			1					1	4.7	
中学校教材			1					1	4.7	
エプロン					1			1	4.7	
スラックス						1		1	4.7	
各種原型						1		1	4.7	
子供服				1				1	4.7	
自由					1			1	4.7	
計	0	4	5	2	4	4	2	21		

家庭洋裁においても、また縫うことは好きだが製図が苦手だという学生にも、パターンを取り入れるだけで作業への親しみが大いに増してくるものであり、多種のパターンが出回っている折りから、パターンの一通りの使い方はマスターしておく必要があるものと思われる。

本学でもパターン教育については現在盛んに研究しているが、今後の洋裁教育にパターンを取り入れることによって能率化をはかり、同時に学生に応用力をつけさせ、研究させる上で十分な効果を上げられるよう努力している。

## 要 約

本学家政科学生の実態調査の結果は、

1. 被服関係学生の入学動機は、約半数の者は他人にすすめられてであり、被服への目的意識

を持っている者は少なかった。

2. 洋裁教育への期待度は、1・2年を通じて「自分と子供の服ぐらいいは縫えるように」が約半数以上であった。

全国短大の洋裁教育については、

1. 短大学生の高校における出身課程は、普通課程出身者のみの短大は21.9%であり、その他の短大においては家政課程出身者は11~20%という割合の学校が最も多かった。
2. 各短大の採用している洋裁方式は、大学独自のものが38%で、他の方式の中では文化式が最も多かった。

3. 履習内容は、スカート、ワンピースは調査校全部が課しており、ブラウスは90%、ツーピースは65%であった。

ブラウス製作については、

- 1.ブラウスの製作時期は、58%の短大が1年前期に履習していた。
2. 所要時間は、最小6時間、最大51時間で、最も多いのは16~20時間であった。また学校と家庭の作業の配分は7:3が最も多かった。
3. 補正に要する時間の最も多いのは、3時間であった。そして方法は、学生がグループで補正したものを教師が最後にみて指導する方法が多く、約半数あった。
4. 製作順序については、袖つけしまつは二度縫後手でかがるのが、衿つけしまつはバイヤス仕立てが、脇縫しまつは割って端ミシンが、何れも最も多い。
5. パターン指導については、使用している短大は21%であった。

以上のように、技術面に能力差のある学生を一斉指導して、何れにも満足を与え、個人それぞれを伸ばすために、各大学では相当配慮がなされている。被服の実技指導は、直ちに個人の成果が作品となって現われ、どんなに美しく仕上げても着られないものでは価値がないので、全員を一定水準まで指導者の手によって引き上げねばならぬ点が被服指導者にとって悩みであり、課題でもある。

今後、時代に即応した若い人に魅力があり、要望に応えられる被服指導のあり方の探究が必要である。

最後に、本研究に御協力いただきました全国短大家政科被服担当の諸先生に深く謝意を表します。

## 参 考 文 献

- 1) 荻野千鶴子他, 1971. 短期大学における被服構成および実習に関する研究(第1報), 名古屋女子大学紀要17:15-26, (第2報) 27-39.
- 2) 田中千代, 1970. 服飾事典, 同文書院
- 3) 繊維研究会出版局刊, 1969. 縫製事典, 繊維研究会出版局